

と存候内、村方之者承り、追々見候處外之筈者通例之通り生立有之、纔ニ壹尺五六寸之場所江過分ニ生立、殊に先曲り候を不思儀ニ存、右脇を堀見可申下、鍬を以堀候處、石ニあたり候間脇壹尺五六寸程堀候得者、丈九寸程の處、差渡七寸五分程有之石ニ而膨み候蛇、當月廿四日堀出候旨訴出候、右始末村役人共得と相糾候處、嘉七屋敷之儀、前々よりの屋敷地ニ而、當時者瓦焼場ニ致し、右廻りは灼地ニ而、いつ頃より藪地ニ成候哉、其儀者不相分旨申し候、右之品堀出候ニ付、怪敷筋毛頭無之旨申立、無相違相聞候間、右兩品爲差出見分仕候處別紙龜繪ニ申上候通リニ而御座候、依之御届申上候以上、

午五月〇文化

大貫次右衛門

〔視聽草二集九〕出世竹

此度武州日光道中草加宿在足立郡中曾根村農家忠藏ト申者屋敷うちへ、古今まれなる竹の子生ず、是を名付て世人出世竹と唱へける。略中當五月中旬、ござの如く夢の御告にて、稀なる竹の生すべしとありし處、一兩日の内不思議なるかな、真竹山江ふしまくに玉の付候竹の子、五拾本餘生じ、ふきのとうのごとく生立に玄たがひ枝葉風流にして、世の常の竹にあらず、名竹誠に權現の御神徳、正直一致の身體加護ましく、あら有がたの言の葉を、世の人々に知らしめんためにあら／＼筆に記す、

中曾根村錦山忠藏

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年二月、世々木村燈柄ノ竹枝ヲ生ズルノ記

東都之西有邑曰世々木村、有農夫某者、生質溫厚而能憐人、嘗有窮夫偶於斯雇行以爲業居歲餘而值疾益病、農夫某者閔之、尤加恩意、且與藥朝夕來而看、寒暖之節久而不衰、窮夫每曰、我非與此人有親子之恩、然視吾病殊加恩愛而不止、吾何以報之乎、死亦不忘也矣、口不絕而死、農夫某者又傷之涕泣而葬之於我墓所、修浮屠之法、送葬用竹柄之燈、葬終而樹之於埋葬之上、既今茲經三年而自其燈